

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	孫 語 崎
主 論 文 題 名 :				
聖徳太子信仰成立期の仏教美術——造形と思想の解明				
(内容の要旨)				
奈良・斑鳩地域には、法隆寺を中心として飛鳥、白鳳時代に製作された主要な仏像が集中する。これらは日本仏教史における最初期の遺品であり、日本がどのように仏教を受容し発展させたかを知る上で最も重要な史料といえる。本論文ではそれらのなかでも代表的な仏像を取り上げ、造形様式や思想的源流とともに、像が製作された背景を考究したものであるが、その考察の主軸に聖徳太子（574～622）信仰を据える。元来近縁者らによる個人的崇敬より出発した聖徳太子信仰は、律令国家形成過程の中で日本の国家仏教において思想的基盤を担う存在へとしだいに発展していく。すなわち太子が、国家権力の象徴である「日本の法王」としての姿と、個人の犠牲により衆生を救う「救世の聖者」としての姿という二側面の様相を持つことが、最終的には以下の論考で明らかにされるはずである。 本論文の構成は、以下の通りである。				
本論				
序章 飛鳥、白鳳時代における聖徳太子信仰と斑鳩地域の造仏状況				
第一節 問題の所在				
第二節 先行研究——日中航路から見る南北起源論				
第三節 斑鳩地域と斑鳩諸寺、諸尊像の造立状況				
第四節 本論の構成及び研究方法				
第一部 「法王」とする聖徳太子——法隆寺金堂荘厳の成立を中心に				
序説 「法王」とする太子相の成立と太子没後の政治状況				
第一章 法隆寺金堂内陣三仏像の意義再考				

序節

第一節 内陣三仏像の造立年代

第二節 三仏配置の成立原理

第三節 内陣三仏像の意義

第四節 東仏の尊格の改変に関する一試論

小結

第二章 法隆寺金堂四天王像考——甲制、服制に関する考察を通して

序節

第一節 金堂四天王像の概要

第二節 金堂四天王像の図像の源流

第三節 金堂四天王像の造立とその意味

小結

第三章 法隆寺金堂壁画における四仏浄土について

序節

第一節 中国における四仏浄土の成立

第二節 隋唐以降における四仏浄土の展開

第三節 金堂四仏浄土と内陣三仏像との関係

第四節 国家仏教の視点に見る四仏浄土の制作背景

小結

第一部の小括

第二部 菩薩・聖賢・仙人——「救世の聖者」とする太子相の成立

序説 聖徳太子の聖者観について

第四章 百済観音像の成立について——竹形支柱をめぐって

序節

第一節 『法華経』に説く観音信仰から見る竹形支柱の意味

第二節 玉虫厨子と中国の作例に見る「竹」や「竹林」

第三節 竹林と聖賢の捨身成道

第四節 聖王としての聖徳太子——百済観音像の成立意義

小結

第五章 中宮寺所蔵半跏思惟像尊格再考——頭頂の双髻表現について

序節

第一節 中宮寺像に見られる双髻について

第二節 中宮寺像に表される総角の意義

第三節 中宮寺像の尊格について

第四節 悉達太子信仰の伝来と聖徳太子信仰との合流

小結

第六章 法隆寺東院本尊像再考——「救世観音」とされる聖徳太子

序節

第一節 救世観音像の図像表現

第二節 太子御影とする救世観音像の成立

第三節 北朝の観音信仰と聖王崇拜

第四節 観音信仰と聖徳太子信仰の合流

小結

第二部の小括

結章

付論

第七章 大倉集古館所蔵の石造桓氏一族如来立像像主の出自について——南北様式の融合に関する一考察

序節

第一節 本像の概要

第二節 銘記から見る桓氏の家族構成

第三節 光背図様における漢民族と西方的要素

第四節 桓氏一族の出自

小結

付表篇

図版

参考文献

初出一覧

論文要旨

本論文は二部構成となっている。

まず第一部「「法王」とする聖徳太子——法隆寺金堂莊嚴の成立を中心に」では、聖徳太子を仏法の護持者であり、万民に慈悲を与える理想的為政者であることを表す、聖なる「法王」とされる一面に注目する。その観点から奈良・法隆寺金堂に安置される三組の仏像、四天王像、そして四壁に描かれた四組の仏菩薩群像壁画について、国家仏教の下で変容する聖徳太子信仰の状況を考察する。

「第一章 法隆寺金堂内陣三仏像の意義再考」では、法隆寺金堂内陣三仏像の尊格をめぐって、造立された当初の意義を論じる。法隆寺金堂の中央に納められる内陣三仏像の尊格は、従来それぞれが阿弥陀・釈迦・薬師とされるものの、近年東仏の台座に描かれる台座画の発見により、東仏は元来弥勒として造られたと指摘される。これを踏まえるならば、内陣三仏像は当初、阿弥陀・釈迦・弥勒の三世仏として造られ、それが上宮王家の相続関係をあらわすという可能性が考えられる。さらに、後の尊格の改変に関しては、天智朝から持統朝の皇位継承をめぐる一連の問題、特に天武天皇、及び草壁皇子即位の正統性を顕すために強調されるべき「貴母所生」、すなわち母系血脈によって生じた皇位継承の関係が大きくかわるものと推察する。

「第二章 法隆寺金堂四天王像考——甲制、服制に関する考察を通して」では、法隆寺金堂内陣に安置されている四天王立像をめぐって、その祖形や様式を再確認しながら、内陣三仏像との関係及び金堂莊嚴における意味を考察した。法隆寺金堂四天王像は現存最古の四天王作例とされ、その様式的源流は中国における東西の美術様式を兼ねていることにより、本像の祖形は中国北齊、或いは中国全土を統一した隋代の著甲像に求め得るものと考えられる。さらに、本像が当初から金堂に安置される群像配置の一部として成立したことを前提とすれば、本像は仏法の守護者や天帝の代行者という役割に加え、

天皇を補佐し国家を鎮護する諸臣を暗喩している、と想定できる。

「第三章 法隆寺金堂壁画における四仏浄土について」では、法隆寺金堂壁画における四仏浄土の主題を再検討する上で、金堂の莊嚴における意義に焦点を当て、特に国家仏教的な視点から考察する。法隆寺四仏浄土四大壁の尊格は、一般に四方四仏とされる。しかし、中国の魏晋南北朝以降に流行していた四仏配置の一般様式、並びに当時弥勒がほぼ倚坐像である伝統に鑑みると、その配置は四方に対応するものでなく、各尊が意味する時空間の概念によって法身の四週に安置されたものと考えられる。さらに、天武、持統朝の政治状況、及び法隆寺で行われた国家鎮護の法会に基づき、法隆寺四仏浄土は国家仏教の立場で考案された、天皇治下の四方国土を象徴するものと考えられる。他方、中国大雁塔四仏、あるいは『首楞嚴經』に見る道場四仏などの作例に鑑みると、法隆寺の四仏浄土配置と様式の請来は、道昭等の法相宗僧と深く関わるものと推察できる。

続いて第二部「菩薩・聖賢・仙人——「救世の聖者」とする太子相の成立」では、聖徳太子個人への崇拝を、より私的な「救世の聖者」という太子信仰の一側面から考察する。聖徳太子は摂政時の功績および深い仏教への理解により、生前には近親者に尊敬され、その薨去直後からは仏菩薩に比定され供養された。さらに、太子信仰の発展と国家仏教との合流により、聖徳太子に対する崇拝は太子近親者から広く社会全体へと拡大し、やがて衆生済度に力を尽くした「救世の聖者」へと昇華されたものと考えられる。したがって、以下には百済観音像、中宮寺菩薩半跏像、法隆寺夢殿救世観音像の三像に関する個別の考察を通して、太子崇敬の源流を検討し、さらに「救世の聖者」という側面を示す斑鳩諸像の思想的源流を考える。

「第四章 百済観音像の成立について——竹形支柱をめぐる」では、法隆寺大宝蔵院に安置されている百済観音像の背後に立てられた竹形支柱について、そこに見られる「竹」や「竹林」モチーフの意味を検討し、百済観音像の成立意義についての新たな解釈を試みた。百済観音像の竹形支柱については、従来根元の部分にある山岳文によって須弥山や補陀落山を表象するとされてきたが、当時『法華經』に説く「随願応化」という観音信仰の系統に鑑みれば、竹形支柱は観音が衆生済度のために遊んだ「娑婆世界」を意味する山林の表象であると推定でき、これにより「捨身成道」の菩薩行を意味する

ことを論証する。さらに、飛鳥時代における儒、仏、道の三教の融合に基づき、竹形支柱にみる竹や竹林のイメージには仏教上の意義のみならず、聖賢や仙人を象徴する意義も与えられたと考えられる。さらに、百済観音像と聖徳太子との繋がりを考えるならば、竹形支柱の使用は、天武、持統天皇たちの政治的な意図により神格化された聖王である聖徳太子のイメージを明示し、つまり天武政権の正統性を示す目的があったと結論づける。

「第五章 中宮寺所蔵半跏思惟像尊格再考——頭頂の双髻表現について」では、中宮寺本尊の半跏思惟像の尊格について考察する。特に、像の頭頂にあらわされる双髻の表現に注目して、本像の性格を考える上で、飛鳥・白鳳時代における悉達太子像の造立や悉達太子信仰の状況を詳細に検証した。中宮寺像の双髻表現は、古代の神仙や若者の髪型とされる「総角」である。その意味については、古来若者が結ぶ髻様とされることから、宮廷儀礼と関わるものと考えることができ、未成年の若者、もしくは皇位の候補者という政治上の立場を示す意図があると推察される。こうした意味に従えば、中宮寺本尊は、例えば玉虫厨子の捨身飼虎図に見られる薩埵王子像のように、世俗権力の後継者、つまり一人の王子であったことが想定できる。他方、当時中国、朝鮮半島で流行していた太子像の伝統に鑑みると、本像は衆生済度を沈思していた聖徳太子の姿を重ね合わせた悉達太子像として造立されたものと考えられる。

「第六章 法隆寺東院本尊像再考——「救世観音」とされる聖徳太子」では、聖徳太子を本身とする「救世観音」とされる法隆寺夢殿の本尊菩薩立像をめぐって、聖徳太子が如何なる観音菩薩と関係づけられたかを検討し、太子を救世観音とする信仰の成立について考察する。救世観音像は両手で円形宝珠を捧持する姿にあらわされ、その源流については従来、中国南朝・北朝の二説がある。この問題については、北朝にみられる円形宝珠を捧持する菩薩像の存在が、むしろ北朝後期に造立されたものが多い点から、救世観音像のような宝珠捧持菩薩の祖形を求める際に、北朝、特に東魏、北斉の影響を重視すべきものとする。さらに、本像の造立意義について、論者は像の左第一指と宝珠の蓮台との間にある「小珠」および両脚間の未貫通部分に注目し、本像が金銅仏を参考にして造形されたと推定する。このような金銅仏的表現の遺響について、本像は太子の

念持仏のような、何らかの特別な意味を有する金銅製の宝珠捧持菩薩像を写し、後に太子の名を託して「太子御影」と記すに至ったものと推測する。こうした救世観音像の造立に従い、論者は聖徳太子を救世観音と崇める信仰と、大陸に流行した、観音を「聖王」と結びつける信仰、特に東魏の渤海大王高歓と深く関わる「高王観世音」との共通性に着目し、国家仏教を背景として行われた聖徳太子信仰と護国観音信仰との合流を提唱する。

さて、付論「第七章 大倉集古館所蔵の石造桓氏一族如来立像像主の出自について——南北様式の融合に関する一考察」では、飛鳥、白鳳時代の仏像様式の源流とされる中国南北朝時代の仏像様式に注目し、大倉集古館所蔵の石造桓氏一族如来立像を例に挙げて、五世紀以降に行われた南朝と北朝の様式の融合を考察した。桓氏造像は河北で造立されたが、その着服の様式と光背に見る供養人、伎楽等の表現には、河西、及び中原漢民族の要素が見出せる。これらに基づき、論者は像主の桓氏一族の出自について、五世紀前期頃に江南から長安、さらに華北に移住した桓楚政権の末裔である可能性を論じた。そして最後に、桓氏造像の造立を中心に、「亡人」すなわち南朝貴族が北に身を投じる状況下で始まった南朝と北朝の仏像様式の融合を検証した。

Thesis Abstract

No. _____

Registration Number	☐ “KOU” ☐ “OTSU” No. _____ *Office use only	Name	SUN YUQI
Thesis Title			
聖徳太子信仰成立期の仏教美術——造形と思想の解明 Buddhist Art During the Formation of Prince Shōtoku Worship: An Exploration of Forms and Ideas			
Thesis Summary			
As a key historical figure who laid the foundations for both Japanese Buddhism and the early Japanese state system, Prince Shōtoku (聖徳太子, 574~622) has long been venerated for his efforts in promoting Buddhism and formulating legal codes. Following his death, he was gradually deified and ultimately revered as the founder of Japanese Buddhism and the spiritual protector of the nation. However, due to the scarcity of contemporary written sources and the mythical embellishments that accumulated over time, many accounts of his propagation of Buddhism are interwoven with legendary elements. This makes material culture—such as extant sculptures and temple structures—essential for reconstructing both his historical persona and the early phases of Japanese Buddhism. The Ikaruga region in Nara, where Prince Shōtoku once lived, is home to several major Buddhist temples closely associated with him, including Hōryū-ji (法隆寺) and Chūgū-ji (中宮寺). These sites preserve iconic Buddhist sculptures from the Asuka and Hakuho periods, which are among the earliest surviving artifacts of Japanese Buddhist history. As such, these images are invaluable for understanding the early forms of Japanese Buddhism as well as the historical context of Prince Shōtoku’s religious activities. This dissertation centers on Prince Shōtoku and explores his dual identity: on one hand, as the "Hōō" (Chakravartin, Dharma King) symbolizing state authority, and on the other, as a “Savior” who embodies personal sacrifice for the salvation of others. By examining how his veneration evolved from a personal devotion among surviving relatives and close retainers into a foundational ideology for the Ritsuryō state (律令国家) system, this study investigates how the belief in Prince Shōtoku shaped early Japanese state Buddhism. Key case studies include the sanctification and the statue group of the Kondō (Golden Hall, 金堂) at Hōryū-ji, the temple’s statues of the Kudara Kannon (百済観音像,) and the Guze Kannon (救世観音像), as well as the statue of a sitting contemplatively in the Ardha Padmasana position (半跏思惟像) housed at Chūgū-ji. Through an analysis of their iconographic features and ideological origins, this dissertation seeks to illuminate the spiritual intentions behind these sculptures and the historical contexts of their creation. Furthermore, the study situates the cult of Prince Shōtoku within the broader political and religious landscape of East Asia between the 5th and 7th centuries. This period, marked by the integration of nomadic and agrarian cultures, witnessed the spread of Buddhism and the emergence of the concept of the “Buddhist State” and "Buddhist Sacred Emperor" in China. As exchanges with the continent deepened, similar ideas were introduced into the Korean Peninsula and Japan, giving rise to localized forms of sacred kingship. By comparing Buddhist sculptures from the Ikaruga region with East Asian sculptural traditions, this dissertation traces how continental			

Thesis Abstract

No. _____

influences—particularly from the Northern Qi and Sui dynasties of China, and the Korean kingdoms—were absorbed and transformed into a uniquely Japanese form of Shōtoku veneration within the East Asian Chakravartin tradition.